

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 2月27日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520319

研究課題名（和文） 近代タイの国民作家シーブーラパーの総合的研究

研究課題名（英文） A Comprehensive Study of Sriburapha in Thai Modern Literature

研究代表者

宇戸 清治 (UDO SEIJI)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：30185053

研究成果の概要（和文）：シーブーラパーの総合的研究によって得られた成果は以下の通りである。まず、シーブーラパーは作家にとどまらず、近代文学の主導者、ジャーナリスト、社会運動家、仏教研究家の4つの分野でタイの近代化に大きな功績があったことを明らかにできた。彼の人道主義の思想が今日のタイで改めて評価されている理由をおおよそ解明できた。また研究に付随して、その著作をはじめとする関連資料をほぼ揃えることができ、内外の研究者に公開できる体制が整った。作品の一部も日本語訳で刊行することができた。

研究成果の概要（英文）：The results that I got from the Sriburapha's comprehensive study are as follows. First I found that Sriburapha was not only a writer but also the leader of Thai modern literature, a journalist, a social activist and a Buddhism researcher, so he had great achievements in the modernization of Thailand. I could confirm that his humanistic thought is reevaluated in Thailand nowadays. And accompanying with this study, I could completed almost all of his works and publications that related to Sriburapha, and I could share these publications with domestic and foreign researchers. In additional, I translated and published his works in Japanese language.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文化論

キーワード：タイ、シーブーラパー、人道主義、国民作家、ヒューマニズム、近代文学

1. 研究開始当初の背景

(1) わが国では1970年以降、タイとの政治的、経済的結びつきを強める中、当該地域の歴史、政治、経済、社会、宗教に関する研究が進み、東南アジア学会の研究者たちを中心として

世界の学会をリードする多くの知的成果が得られた。しかし、人文科学分野、特に東南アジア文学やタイ文学研究に限ればその進展は微々たるものでしかなかった。過去20年間にわたり、大学で東南アジア文学、タイ

文学の研究・翻訳、教育を行ってきた代表者としては、タイ文学研究は社会科学等からのアプローチと並んで、タイ人の価値観や規範意識といった知的営為の体系的理解に道を拓くもので、その成果は超域的に他の学問分野でも応用できるものであるという観点から、本研究をさきがけとしてよりいっそう研究を深化させていく必要があった。

(2) シーブーラパー（本名クラブ・サーイプラディット、1905～74）は「タイ近代文学の父」と呼ばれる功績を残し、小説、評論、その他の文化活動を通じて残した思想は今もタイで大きな影響を与えている作家である。1974年に亡命先の中国で客死するまでの69年間の生涯において、シーブーラパーは啓蒙作家として『人生の闘い』、『絵の裏』、『未来を見つめて』など15点の長篇、「少し力を」、「彼は目覚めた」など多数の短篇、ロシア作家ゴリキーの『母』などの外国文学の翻訳のほか、「人道主義とは何か」をはじめとする社会評論、『仏教と理想』などの宗教書を著したほか、作家集団「スパープ・ブルット」（紳士）の主導者としてタイ近代思想の発展に尽くした。このような近代タイの知識人を代表するシーブーラパーの思想の総合的研究を通じて、近代タイにおけるイデオロギーや価値観を分析することで、その成果を超域的に他の分野でも応用可能であると考えた。

2. 研究の目的

(1) 近代タイ文学の中でのシーブーラパー作品の特徴を分析し、彼の文学観と文学的意義、とくにその人道主義を彼の仏教思想との関連で明らかにすること。

(2) シーブーラパーが主宰した若手作家集団「スパープ・ブルット」の発行した同名文芸誌に掲載された同人たちによる諸作品の分析を通じて、当時のタイ社会におけるモダニズムの実態を明らかにすること。

(3) シーブーラパーの人生観、社会観、政治思想を主として各種評論によって分析するほか、まだ明らかになっていない16年間の中国亡命時代の政治活動やタイの反政府組織との関係について資料収集し、その分析を通じて新たなシーブーラパー像を提示すること。

3. 研究の方法

(1) 3年間を通じて、東京外国語大学図書館、国会図書館、朝日新聞社資料室、京都大学東南アジア研究所などで、タイ語作品（長篇、短篇、評論、その他）、外国語に翻訳された作品、作家論・作品論としてのシーブーラパー研究に関する論文を収集し、作品毎の解説

を通じたデータベースを作成する。

(2) 優先順位をつけた上で、必要な作品や文献を随時、翻訳し、可能な限り刊行などの方法で公開する。

(3) 大学の夏期休暇などを利用して現地での調査、収集活動を行う。タイ作家協会、資料館「シーブーラパーの館」、タイ国立図書館での資料収集や聞き取りを行うと共に、「シーブーラパー賞」（1988～）委員会関係者や遺族との意見交換を行う。

(4) 数少ない国内の日本人タイ文学研究者およびタイ人研究者とコンタクトを取り、各年度の研究成果をめぐって意見交換と研究方法の深化をめぐって研究会を実施する。

4. 研究成果

(1) 平成20年～22年度の3年間にわたり研究課題「近代タイの国民作家シーブーラパーの総合的研究」に必要な関係資料（日本語書籍、欧米語文献、現地タイ語文献、聞き取り調査、書簡、写真、映画化された作品の電子媒体等）を収集することができた。これによって、タイ国立図書館にしか所蔵されていない（欧米における資料の存在は現時点では確認がとれていない）文芸誌『スパープ・ブルット』のバック・ナンバーを除くほぼすべての資料が揃ったことになる。今後は、引き続きこれら収集資料の翻訳等を含めた解説作業、およびデータベース化を行い、その成果を随時、刊行物やウェブサイト上で一般に広く公開することで、内外のタイ文学研究者に便宜供用できる素地ができた。

(2) この間、英語にも訳されたことのあるシーブーラパーの長篇『また会う日まで』、長篇『罪との闘い』、短篇「彼は目覚めた」を編訳した『罪との闘い』（財団法人大同生命国際文化基金、2008.11）を刊行することができた。

(3) 3年間にわたる資料収集と分析の結果、シーブーラパーに関する詳細な年譜を完成させることができた。経歴とその時々の言論活動に関する紹介は、上記『罪との闘い』の巻末論文「タイ文学の巨匠シーブーラパーの軌跡とその作品世界」に所載されている。

(4) 作家としてのシーブーラパーの作品（フィクション）研究の成果を主要作品に絞って記述すれば、以下の通りである。

①長篇『人生の闘い』（1932。邦訳はまだない）。ドストエフスキーの『貧しき人々』を下敷きに書かれた本作品は、絶対王制が倒さ

れた立憲革命の年に発表されている。タイ最初の人道主義小説であるという評価が高かったものであるが、研究の結果、物語の構造という面から見れば通俗恋愛小説であり、その意味では欧米文化に染まりつつあった当時の都市市民層の趣味に合致したものであったが、主人公の性格とその思想の面から見るならば、いわゆる「モラリズム小説」であることが明らかになった。しかも主人公の口を借りて語られる仏教的ヒューマニズムは、当時のシーブーラパーの思想的限界を露呈したものとなった。つまり、彼は創作を通して人間意識の相対性の中に真理を見出すという方法を採らず、結局は近代人としての自我の確立という方向へは向かうことなく、人間と社会の認識の方法をタイの伝統的な仏教倫理に委ねてしまっているのである。当時から始まった、南タイで新仏教運動を行っていたプッタート比丘との交流からも、彼の仏教への傾倒が読みとれる。ここには、シーブーラパーに限らず、近代タイ知識人の依って立つ哲学、思想の問題が横たわっており、タイにおける知的営為の研究にはこの問題を究明が欠かせないことが併せて明らかになった。

②長篇『罪との闘い』(1934。邦訳あり)。1935年の訪日や1947年の訪豪以降に思想的転換を果たす前のシーブーラパーの、近代的自我の獲得を目指して苦悩する屈折した知識人の姿を赤裸々に描いたこの作品では、『男児』(1932。邦訳なし)や『人生の闘い』に見られた平凡な人間認識、社会認識は影をひそめ、主として近代人としての思想的虹筒する個人の苦悩が描かれている。恋愛小説のスタイルの中にそれを巧みに採り入れた小説技法もそれまでの作品より優れているが、後期の小説に見られる民衆への啓蒙という側面はまだ薄い。思想的転換を果たす前の中期作品と言えることが明らかになった。この時期の作品には他に『最高の望み』(1932。邦訳なし)、『人生に必要なもの』(1936。邦訳なし)、『絵の裏』(1937。九州大学出版会の邦訳あり)があり、それらとの綿密な対象によって、中期作品の特質をより明確に定義することが残された課題である。

③長篇『また会う日まで』(1950。邦訳あり)。タイの貴族の子である留学生がオーストラリアの女性労働運動家を通じて自我に目覚め、タイ社会の変革を決意するに至るといふ本作品のストーリーは、シーブーラパーの思想的転換を明確に示した作品と言える。この中ではタイに民主主義が根付かない事への失望感が率直に描かれ、権威や権力とは距離を置く知識人として生きる覚悟が述べられている。言論によって民衆の意識の覚醒を図

る姿勢は、この作品の後に続々と発表された短編小説でより明確なものとなり、そのテーマはすべて、社会的不公平を糾弾したり、富貴や身分に関係のない人間そのものの価値を前面に出すものとなった。シーブーラパー思想の重要な結節点となる作品であることが明らかとなった。同時に、シーブーラパーが小説という形式を、自己の思想を表明する手段として用いる姿勢がより鮮明になった作品でもある。ジャーナリストから出発した初期のシーブーラパーは、この作品を契機に(実質的には豪留学によって、自国の政治、社会、文化を相対化して見る事が出来るようになった以降に)、再び社会批評家、社会運動家に戻っていった。

(5)近代文学の主導者としてのシーブーラパー研究の成果

1929年に結成された若手作家集団「スパープ・ブルット」(紳士)を主宰したことが最大の功績である。研究によって、「スパープ・ブルット」という語が、タイ社会にまだ「ブーディー」(上流人)という身分意識的な言葉しかなかった時代に、弱者や不公平な扱いを受けている人間を助ける騎士道精神に倣って独自に創造された新しいタイ語であり、タイ社会を改革するためのキーワードとして用いられ、そこには、小説を書くという行為は、従来のように「ブーディー」に独占される趣味的なものではなく、一般の平民にもできるのだという宣戦布告の意味が込められていたことが分かった。主要メンバーにはマーライ・チューピニット(メアノン)、ヤーコーブ、ポー・ネートランシー、ユーモアリストなど当時のタイ近代文学をリードした18人がいる。彼らはシーブーラパーの指導の元、西欧近代思想の摂取と紹介、言論の自由、人道主義、作家の経済的自立を謳い文句に、隔週刊の雑誌『スパープ・ブルット』で創作や時事評論の腕を競った。この雑誌には当時のタイ・モダニズムが濃密に盛り込まれていた。過去、同人の当時の作品は再版も研究されることもなく歴史に埋もれていたが、2010年3月に「スパープ・ブルット基金」(スチャート・サワッシー編集長)によって、苦勞して収集した当時の作品を網羅した大部の復刻版が発行された。本研究には間に合わなかったが、本書がこれからのタイ近代文学研究に弾みをつけたことは疑いがない。

(6)ジャーナリスト、社会運動家、在野の仏教研究者としてのシーブーラパー研究の成果は以下の通りである。

①ジャーナリストという側面からは、シーブーラパーは『スパープ・ブルット』に作品を掲載する一方で、「バンコク・カーンムアン」

(タイ政治)、「タイ・マイ」(新タイ)、「ブーナム」(指導者)、「サヤームラート」(タイ国民)の各新聞の編集・執筆に関わり、精力的に政治・社会評論を掲載していたが、「シークルン」(王都)紙に掲載された評論「人道主義」(マヌッサヤパー)が反体制的であるとして、当局により新聞の発行停止処分を受けたことが分かっている。しかし、これらの新聞はタイ国立図書館にも所蔵されておらず、当然マイクロフィルム化もされていないこと、ごく一部が「シーブーラパーの館」や遺族、個人収集家によって保存されていることが分かった。今後は当時のタイと交流のあった欧米の図書館・資料館(特にイギリス)まで資料収集の手を伸ばす必要がある。世界大戦の最中の1939年、シーブーラパーは「ブラチャーミット」(国民の友)と「スパーブ・ブルット」の2紙を創刊し、1941年12月、南タイなど数カ所からタイに侵攻した日本と軍事協定を結んだピブン政権に対し、戦争協力への反対、政治的中立の主張を繰り返した。そのため国内外反乱罪で逮捕され3ヶ月に渡り投獄されたが、後に証拠不十分で釈放された。1942年にプリディー・パノムヨンの指揮下で抗日組織自由タイが結成されると、直接これに加わることはなかったが、言論面でこれを支援した。戦後、ラーチャダムヌーン通りで行われた自由タイ・メンバーによる行進の写真にはシーブーラパーの姿が映っている。なおこの当時は、数編の短篇を除いて創作はほとんど行っていない。この年、報道の権利と自由を旗印とする新聞協会の設立に関わったシーブーラパーは、その後、会長を2期(1943~46年)にわたって務めている。これらのことから分かったことは、シーブーラパーという作家が、人間性への素朴な信頼、西欧的教養主義、歴史の進歩や普遍的な価値への信仰、仏教の持つ道徳的規律を思想的基盤として、文学をそれ自体、自立的機能を持つ言語芸術の世界に押しとどめることなく、社会や現実への欠陥を指摘し、民衆に社会の進むべき道を明示するイデオロギーを媒体する道具と位置付けていたことである。社会主義リアリズム文学の教科書とも言われるゴーリキーの『母』をタイ語に訳したことからそれは分かる。

②社会運動家の側面の研究で分かった成果は以下の通りである。1952年、タイ新聞協会会長とタイ平和委員会副委員長の地位にあったシーブーラパーは、1941年印刷法や新聞検閲の廃止、アメリカの朝鮮戦争遂行に反対する平和運動を展開すると共に、干魃と冷害に苦しむ東北タイ農民に対する救援物資配給活動を行ったが、11月にバンコクへ戻ったところを反乱罪で逮捕され、禁固13年4ヶ月の判決を受けた。この時の投獄生活で執筆

されたのが、タイ現代文学の最高傑作の一つに数えられる自伝的な長篇『未来を見つめて』である。週刊誌「ピヤミット」(親友)に連載されたもので、上巻は1955年、下巻は1957年に出版されている。安藤はその後書きで、『未来を見つめて』は「社会公正の追求という明らかな意図を持って、歴史の意義で書いた歳時記であり、また民主主義の啓蒙書でもあり、そこには作家のヒューマンイズムが輝いていて、大衆に対する暖かい親近感が強く表現されている」とこの小説の性格を記している。仏暦2500年(1957)の特赦(恩赦請願書を出せば放免するとのピブン首相の提案に対し、不当投獄であるとの主張を曲げず特赦を勝ちとった)で自由の身となったシーブーラパーではあったが、当時のタイは警察長官のパオと陸軍元帥のサリットの間で熾烈な権力闘争が行われており、最終的にはサリットがクーデターによってピブン政権を倒し、反共政策を継続した。パオに新しい新聞のオーナーの話を持ちかけられたシーブーラパーは、あくまでも国民の声の代弁者でいたいとして、これを断っている。この年、シーブーラパーはソビエト革命40周年記念式典に招かれ、翌年の1958年8月には13名からなる文化交流使節団の団長として北京を訪れた。10月にはタシケントで開催されたアジア・アフリカ作家会議にも出席している。その直後、サリット元帥によるクーデターに続いて多数の作家、ジャーナリスト、知識人が逮捕され、自己の著書などが共産主義の宣伝書と見なされ販売、所持を禁止されたという報が伝わると、そのまま中国亡命を決意した。これ以降、1973年に民主化されるまでシーブーラパーの名は言論界で封殺される状態が続いたことはすでに述べた。亡命後のシーブーラパーは、1960年に毛沢東や周恩来と会見したり(この時は「タイの魯迅」と紹介されている)、1964年の北京科学討論会、1965年の米国侵略反対ベトナム人民支援国際会議(ハノイ)にタイ代表として参加したりしたほか、1966年のアジア・アフリカ作家会議では議長として演説を行っている。北京放送のタイ語放送番組で自分の中国見聞をタイ人に報告したこともある。その後、タイでの民主化運動の成功を知った一年後の1974年6月16日、心臓病と肺炎のため北京の病院で69歳の生涯を閉じた。中国滞在中のシーブーラパーの軌跡はまだ不明な点が多いが、生誕100年の記念出版で明らかにされた事績や、1980年に北京から帰国した遺族および北京に留まり続けている文化使節交流団のメンバーなどの証言から、今後その研究が進んでいくものと期待される。なお、タイ作家協会事務局を兼ねる「シーブーラパーの館」を訪ねた際、遺族から中国亡命時代の記録を収集し、まだ明らかにさ

れていなかった当時の活動を知ることができた。現在も北京にはシーブーラーの元同志が生存していることが明らかとなった。

③在野の仏教研究家という側面の研究成果は以下の通りである。新仏教運動の中心人物であり、仏教社会主義を掲げて知識人に影響を持ったブッタート比丘と33歳の頃から交流のあったシーブーラーは、1952年に南タイのスアンモーク(涅槃園)に比丘を訪ね、仏教の神髄に関する対話を行っている。比丘は1993年に亡くなるまで、資本主義社会の物質至上・消費主義的傾向に対し精神的価値を持って対抗する進歩的仏教指導者として、今日でも知識人の中でその教えを信奉する者が多い。ウバーソク(優婆塞)の筆名で「ウィパッサナサーン新聞」に連載した『仏法と仏教に関する13章』(1955~57)は仏教にタイするシーブーラーの造詣の深さを示すものであった。

(7)シーブーラー思想の総括

上述したように、シーブーラーという作家は、根本的には人間理性の信頼、西欧文明への素朴な共感と懐疑、進歩的な歴史観、人間社会に存在する普遍的な価値の信仰、タイ伝統仏教の持つ規範力を自己の思想的基盤として、文学をそれ自体、自立的機能を持つ言語芸術の世界に押しとどめることなく、社会や現実への欠陥を指摘し、民衆に社会の進むべき道を明示するイデオロギーを媒体する道具と位置付けていたことが如実に読み取れる。

彼が小説世界で訴えてきた社会的公平、身分意識の一掃、民主主義といった指標は、今日のタイでは相対的にはあるがすでに実現されている。1980年代以降の猛烈な経済発展と確たる市民階層の誕生は、もはや以前のよう軍部による民主主義への容喙を簡単には許さなくなっているし、昨今の政治的混沌も、タイ的な民主主義の一定の成熟ゆえの過渡的現象と見られないこともない。むしろタイ社会においても、グローバリズムとポストモダンの洗礼を浴びている多くの国々と同様に、社会の極度の組織化に伴って急速に分節化され、孤立化していく人間存在のあり方こそが、現代タイ文学のテーマとして浮上してきている。1981年に発表されたチャート・コープチッティの自然主義的小説『裁き』(カム・ピパークサー)がその一例である。そこではチャートは、文学に啓蒙のための教育的役割を持たせることを拒否し、精神的、社会的に解体していく人間、自由意志を奪われ、本能と状況に支配される生の人間を描いている。このような時代にあつて、シーブーラーの作品はどのような今日的意義を持

つのだろうか。シーブーラーの生涯を仔細に見ると、彼には作家のほかに新聞人としての側面が強くあったことが分かる。むしろ新聞人としての言論を展開する中で、あるべき人間、あるべき社会、あるべき国家の理想が形作られていったのではなかろうか。本格的な執筆活動に関わり始めた1930年代当時、新聞は単に事実を知らせるだけでなく、一般人が知性を表現する唯一のメディアだった。小説家と編集者は今日のように分離しておらず、多くの場合、編集者が一人で記事も批評も小説も書いたのである。新聞の使命が大衆に現実や事実を知らせることだとすれば、この当時の新聞はそれを超えて、事実の背景に迫る真実までも伝えようとした。『悪との戦い』には、マナットがジェンに対し「でも好きなのはFACTを書く方かな。多分、神様がそう決めて、FACT向きの頭にしたんだと思う。小説家も同じさ。でも彼らがFACTを書いたら、やはり僕より上手かも知れないね」と言う場面がある。事実には小説の持つフィクション性は入り込む余地はない。しかし人間と社会に横たわる真実は、評論の形でも小説というフィクションの形でも伝えることが可能だ。真実の絶えざる希求は精神を鍛え、次々と生起する現実や事実に対する正しい判断、正しい対処、正しい生き方を可能とする。1954年の「小説についての考察」という講演の中で、彼は「我々が見るもの、異なった考えを生み出すもの、その異なった考え、こうしたものはその人物がどう見るか、どのような角度から見ると、どのような世界観で見るとかによって違う。多くの作家は、事実に従った人生を描いているのだと理解しているが、そのことこそが熟考してみるべき問題なのだ。自分が、大多数の人も見ている事実であると思って書いたことは、もしかしたら金持ちにとっては事実かもしれないが、貧乏人にとっては事実とは違うかもしれない」と事実と真実の違いを述べている。シーブーラーが民衆に望んだのは、事実を見抜く力であった。それなくして、民衆がくびきを脱することはできない。彼の中には、事実から真実を演繹し、真実から事実を検証する、その絶えざる実践の先にしか、タイの民衆の近代的個我の確立と理想的な社会の実現はないという固い信念があつたのではなかろうか。そう考えるならば、物質的繁栄に反比例するかのよう分断化され、バーチャル化した社会の中で生きる意味を失いかけている現代人が、決して正体を見せることのない混沌の状況の向こうに隠されている真実を求めようとする時、シーブーラーの作品と思想に見る人間、社会認識の方法は今もなおその輝きを失ってはならず、これからも多くの指針を与えていくに違いないと思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[図書] (計 1 件)

①宇戸清治、大同生命国際文化基金、罪との闘い、2008、287 (うち論文「タイ文学の巨匠シーブーラーの軌跡とその作品世界」271～287)

[その他]

ホームページ等

<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/udo/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇戸 清治 (UDO SEIJI)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：30185053